

研究機関名：東北大学

1.受付番号	2018-010
2.研究課題名	かき混ぜ文の聴覚的理解の困難さの解明 －事象関連電位を指標として－
3.研究期間	2019年8月（部局長承認後）～2020年3月31日
4.研究の概要	<p><b>意義・目的</b></p> <p>本研究は、文を聴いたときの反応を認知神経科学的に明らかにしようとするものである。</p> <p>日本語は、「太郎が花子を追いかけた」のような、主語－目的語－述語動詞（SOV 語順）の語順が基本であるが、他に「花子を太郎が追いかけた」のような目的語－主語－述語動詞（OSV 語順）という語順もあり、これはかき混ぜ文と呼ばれている。かき混ぜ文は基本語順文に比べると文法構造が複雑で理解されにくい。言語に障害のある者の中には助詞を理解できないために、かき混ぜ文の理解困難な状態が持続してしまう場合がある。現在、このかき混ぜ文理解を促す訓練方法はまだ確立されていない。訓練法を確立するためには、まず健常者がかき混ぜ文を理解する神経基盤を明らかにする必要がある。そこで、本研究では、健常者を対象とし、文の聴覚的理解について、認知神経過程の時間解析能に優れる脳波の事象関連電位を通して検討する。文を音声で示し、かき混ぜ文と基本語順文を聴いたときの脳波を計測し分析する。かき混ぜ文を聴いたときには、基本語順文を聴いたときと比較して、P600 や SLAN (Sustained Left Anterior Negativity)の成分が観察されると予測している。</p> <p><b>方法</b></p> <p>健常者 20 名を予定している。35～65 歳、脳血管疾患の既往がなく、知的機能の低下がない右利き（矯正なし）の者とする。事前に十分に説明を行って理解を得た上で、参加候補者本人の自由意志での参加を求める。基本語順文とかき混ぜ文をパソコンによって音声で呈示し、そのときの脳波を測定する。知的機能の低下がないか確認する目的で日本版レーヴン色彩マトリックス検査を行う。利き手の検査として日本版 FLANDERS 利き手テストを行う。</p> <p><b>問い合わせ・苦情等の窓口</b></p> <p>東北大学大学院 文学研究科 言語学研究室 電話：022-795-5983</p>